

# 英文解釈必要論

## —英文解釈で育むコミュニケーション力 ～『Viewpoint 英文読解の着眼点 15』シリーズを活用して—

久野 靖洋

### 1. はじめに

日本の英語教育がコミュニケーション重視の方向へ転換するとともに、学校教育現場では「コミュニケーション力=話す力」と捉えられ、会話偏重と文法軽視の傾向がみられるようになってきている。英文解釈に関しては必要ないと言われるほど重要視されなくなっているのである。

しかし、そもそもコミュニケーションには読むことも書くことも含まれているはずだ。特に近年のIT化やコロナ禍の影響で、メールなど文字ベースでコミュニケーションをとることが主流になりつつある。相手の顔が見えづらい状況では、伝えたいことを的確に書くこと、文章から相手の意図を正確に読み取り理解することがとても重要になってくる。

杉山(2014)によれば、英語でそのような力を身につけるためには、「基礎的な英語の運用能力が身につけていることが不可欠」であるという。その基礎力を養うための手段として、英文解釈は大切な学習方法の一つであると私は考えるのである。

また、日本の限られた英語教育の時間の中では、母語という既にもつ基礎能力を使いながら繰り返し学ぶことが英語習得には効果的だと考える。その点においても、英文解釈は有効な学習方法だと言えるのではないだろうか。

英文解釈の参考書は、1～3文くらいの短文でポイントを解説するものが多い。また、単元ごとに「動名詞」「関係詞」といったテーマが示されているものが多く、順序立てて学習するにはとてもわかりやすい構成になっている。しかし、そのような方法で学習したにも関わらず、いざ長文を読むとなると文の構造がよくわからず、意味が取れなくなってしまう生徒は少なくない。考えられる理由の一つとしては、英文法の知識を長文に当てはめることができないということである。長文になると複雑な文構造

になり、文法も複数重なってくるので解釈が難しくなる。また、短文とは違って、前後の文が解釈に影響してくることもあるのだ。

そこで注目した問題集が、竹岡広信先生監修の『Viewpoint 英文読解の着眼点 15』シリーズ(以下『Viewpoint』シリーズ)である。この著書は、冒頭にある英語の長文を読む際に必要とされる基本的な『型』=着眼点を確認し、それが実際の英文の中でどのように使われているか確認できるようになっている。長文読解ができるようになるために、長文の中で英文解釈を行えるような構成にしているのである。授業では本シリーズを使い、英文法と長文読解の橋渡しとなるような英文解釈の学習指導を行った。

### 2. 『Viewpoint』シリーズがなぜよいのか

本シリーズをなぜ英語解釈の学習指導で使用するかと言えば、前述の通り、長文の中で英文解釈を行えるようにしているからである。以下に、学習指導においてこのシリーズを採用して具体的によかったと思う点を挙げる。

#### ① 読解の技法(着眼点)が長文に何度も繰り返し登場する

『Viewpoint』シリーズのよい点は、既習の読解の技法(着眼点)が、あとのレッスンでも繰り返し登場し、練習できるという点である。多くの英文解釈の問題集は、「動名詞」「関係詞」といったテーマとなる文法項目の学習はできても、あとのレッスンでその項目が出てくることはめったにない。本シリーズは多くの着眼点が繰り返し登場するため、学習を進めることで着眼点が定着し、複雑な構造の文にも対応できるようになるのである。

#### ② 長文にある読解の技法(着眼点)が解説してある「文構造を Check ✓」

解答編の解説にある「文構造を Check ✓」では、



#### 4. 『Viewpoint』シリーズを活用した授業の一例

〈1 限目〉

- ① 単語リストの発音や意味の確認(3. —①)
- ② 着眼点の確認, 解説
- ③ 導入(3. —③)
- ④ 本文を読む
- ⑤ 問題を解く
- ⑥ 答え合わせ, 解説

〈2 限目〉

- ① 本文全体読解
- ② プリント下線部の英文解釈(3. —②)
- ③ ②の解説
- ④ 本文全体音読

#### 5. さいごに

英語の長文読解に近道はない。文法や単語の知識を習得し、得た知識をもとに一文を正確に読んで理解し、長文を読み解いていく。この地道な学習が確実な力につながる。英文解釈は、単語や文法の知識と長文読解の橋渡しという役割として有効な学習手段と言えるだろう。また、母語の言語感覚を活かすことが日本の英語学習環境には適していることから、授業では英文解釈という学習方法をうまく取り入れていく必要があると考えるのである。

今、コミュニケーション重視による会話偏重が英語学力の低下を招いた可能性が高いと言われている。しかし、コミュニケーション力と言えば読み書き能力もその一つなのである。現代において読み書きの重要性が増していることを考えれば、会話か読み書き、どちらかに偏ることなくバランスの取れた授業構成に舵を取る必要があるのではないだろうか。そもそも会話力を養うためには、読み書きにより培った基礎学力を身につけていることが前提であることを忘れてはならない。英文解釈はそのような確かな英語力を養う授業づくりの一助にもなり得ると考えるのだ。

日本の学校教育にふさわしい英語学習法として練り上げられてきた英文解釈法。あらためてその学習意義と課題を考え、生徒の英語力育成に役立てていきたいと考える。

#### 参考文献

- 杉山幸子(2013). 「文法訳読は本当に『使えない』のか?」『日本英語英文学』第23号, pp.105-128
- 鳥飼玖美子(2016). 『本物の英語力』講談社現代新書
- 江利川春雄(2010). 「7.11 慶應シンポ 英文解釈法の歴史的意義と現代的課題(7)」  
<https://gibsonerich.hatenablog.com/entry/17194068>

(聖霊中学高等学校 講師, 英語専門塾ジョエル主宰)